美の復讐

●狩野洛山真贋事件

三好　徹

新潮ポケット・ライブラリ

三好　徹

美の復讐

ポケット・ライブラリ

46

新潮社版

美の復讐

著　者　三好　徹
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町71番地
電話東京（341）7111—9番
振替東京808番

印刷所　塚田印刷株式会社
製本所　神田加藤製本

定　価　230円

1963年8月11日　印刷
1963年8月15日　発行

乱丁，落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

© 1963 Printed in Japan

三好徹

美の復讐

ポケット・ライブラリ

46

新潮社版

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

美の復讐

=狩野洛山真贋事件=

第一章

1

花曇りというには、まだはやい感じで、地を擦るように吹いてくる風には、冬の名残りを思わせる冷たさが含まれている。コートを着ないで外出してきたことに、軽い悔いを覚えながら、加見勇は足早に歩いて、美術会館を目指した。

会館のロビイは、かなりの人数が群れていた。中年を過ぎた男が多かったが、なかには若い娘のグループもあった。五台並んでいるエレベイ

ターの一台が、チンという音を立ててドアを開くと、どっと人が吐き出され、かわって、待っていたものたちが吸いこまれる。流れが接触して、人々の頭が揺れた。

前へ出ようとしたとき、加見は、人群れのなかに、記憶の奥底深く刻みこまれている、透徹した輝きをはなつ眸に出逢って、電流にふれたかのように足を止めた。

「風間さん」と加見は叫ぶように呼んだ。

風間葉子は、背後から押し出してくる客の流れからすいと身をそらせて、加見の前に立った。踊りの名手の型を見るような、あざやかな身のこなしと、その冴えた美貌とが際立った。彼女は、自分を呼びとめたものがだれであるかに気づくと、はっとしたようであったが、すぐに動揺を押し隠し、やや冷たさのふくまれた声で、

「しばらくでございました」と言った。

「本当だ。何年ぶりになりますか」と加見は全身の力を眼にこめるようにして相手を見つめた。

葉子は静かに微笑した。さあ、何年ぶりになりますかしら、と問うているようでもあったが、事実は、加見と出逢ったことの愕きをその微笑のなかにとじこめたのかもしれなかった。

「あなたもこの洛山展を見にいらっしたのですか」と加見は訊いた。訊かなくとも、そうで

あることは推察できたが、それ以外に適当な言葉が見当たらなかったのである。
「はい」と彼女は硬い声で答えた。
「おひとり？」
「兄といっしょに参ったのですが、兄がお友だちの方につかまってしまいましたので、下の喫茶室で待つことにいたしましたの」
「そうですか」
そこで声を切って、加見はちょっと考えたが、すぐに思い切って言った。
「よかったら、それまで、いっしょにお茶でものみませんか」
言ってしまってから、加見は、自分の言い方のぎごちなさに気がついた。
葉子の顔には、困惑と、同時にそれに逆らう感情とがぶつかり合った動きがあらわれ、それを、包み隠そうとするかのように、彼女は掌で口もとをおおいうつむいた。
彼女がためらっている理由は、加見には十分にわかっていることであった。しかし、いつかはこういう日がくるかもしれないという漠とした期待を、この二年間持ち続けてきたこともたしかだった。二年という時間がいっぺんに圧縮されて、さまざまな想い出が、つぎつぎに広がる波動さながらに、彼の感情を揺りうごかして来るのであった。
次のエレベイターがとまり、また新たに、人々が吐き出され吸いこまれた。そのたびに、

沈黙を守って棒立ちになっている葉子の身体が揺れ動いた。
「行きましょう」と加見は低く言うと、先に立って歩き出した。自信があってそうしたわけではなかった。しかし、彼女は後に従った。喫茶室の奥に向かい合って坐ると、待ちかねたように加見は口を切った。
「二年ぶりですね。本当に久しぶりでした」
「お作は拝見しています」と葉子がすっぱりと切るように言った。
「そうですか。それは嬉しいな。ぼくは読んではもらえないだろうと思って、贈らなかったんですが……」
加見は内がわに芽生えてくるわけのわからぬ喜びの波動に身をゆだねたが、それは、すぐさま潰されてしまった。
「だって、わたくしのことが書かれてやしないかと気になるものですから」
「なるほど、そういう意味でね」
加見のあからさまな落胆ぶりに気がとがめたのか、葉子は語を継いだ。
「いまのは冗談ですわ。加見さんが、わたくしのことを絶対にお書きにならないことを信じていますもの」
十秒ほどの短かい沈黙があって空気がこわばりかけたとき、葉子が話題をかえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「洛山展はご覧にならなくても、よろしいのですか」
「洛山展はあしたでも見られるし、きょうだって、これから見ようと思えば見られますよ。しかし……」
最後まで言わせず、葉子がさえぎった。
「本当に、大変な人出ですわ。洛山がこんなに人気があるとは存じませんでした」
彼女の言うように、享保時代の陶工狩野洛山の作品展は、異常なほどの人気を蒐めていた。重要文化財に指定されている『花籠ノ図』をはじめとする絵画や、あるいは、洛山の名を現代に残すのにより一層の力があったと思われる数十点の陶器を一堂に開陳する展覧会は、連日、数多くの都民を会場の美術会館へ呼び集めている。現に、加見も、その評判につられて出てきたのであった。
「たしかに凄い人気ですね。あなたやあなたの兄さんは、そっちの方の専門家だから見にくるのは当然かもしれないが、ぼくのような門外漢まで、そんなに評判ならひとつ見てこようと思ったくらいなんだから……」
そのとき、葉子がほっとしたように手を挙げて、だれかに合図を送った。振り向いた加見の眼に、入口に立って店内を眺め回している二人の男の姿が映った。
一人は、加見にも見覚えのある風間洋介であったが、連れの五十過ぎた、どことなくいや

しげな眼差しの男には記憶はなかった。

風間洋介は、妹と同席している加見を認めて、やはり意外だったとみえ、二、三度、眼をしばたたいた。加見は面映ゆかったが、感情を押し殺して、挨拶した。洋介は、ちょっと眉の線を硬くしたが、それでも、落ち着いた口調で挨拶をかえすと、連れの男を、だれにともなく、

「梅島さんだ」

と紹介した。

流行おくれの襟幅の広い背広は、色も褪せている。薄い眉の下のくぼんだ眼は、たえず獲物を求めるけもののように動き、貪婪な感じを漂わせた。加見は、その梅島という初対面の男に好い印象をもつことはできなかったが、相手は、いささかも、そういうことを意に介しないようであった。爪の長い手を内ぶところに滑りこませると、二枚の名刺を抜き出して、加見と葉子の前に差し出した。

名刺には

東都古美術協会
幹事　梅島隆市

とあった。

「古美術協会の方ですか」と加見は言った。

もっとも、加見自身、東都古美術協会なるものがどれほどの権威をもっているかを識っているわけではなかった。しかし、名称から受ける感じでは、ひとかどのものと思えた。

だが、風間洋介は、にべもなく言った。

「名刺の肩書きの立派さに感心してはいけませんよ。古美術界のことについては、いくらかくわしい人なら、こんな協会があったかな、と首をひねるところだ」

怒るかと思ったが、梅島は平然としていた。それどころか、むしろ迎合するかのように掌で首筋を叩き、てれくさそうに笑った。

「先生にあっちゃ、まったくかないませんや」

「本当だから仕方がないさ。しかし、心得たもんだね。会長とか理事長とかの勿体ぶった肩書きをつけないで、たんに幹事と書いてあるところなんか、心理学的効果もちゃんと計算してあるんだね」

梅島は愛想笑いを続けている。それは、卑屈なほどであった。

加見の不審げな面持ちと梅島とを見くらべながら、洋介は言った。

「そのかっこうで、会長、だなんて言っても人は信用しないが、幹事、くらいの肩書きだと、知らんやつは信用するんだから、世の中はおかしなものだね」
たまりかねた葉子が兄の暴言を制止しようとした先手をとって、梅島は白い歯を見せた。
「まったくかないませんねえ。まあ、ひとつよろしく」
加見は名刺をしまいこんだ。
「ぼくは名刺の持ち合わせがないんですが、加見といいます」
「加見さん、変わったお名前ですな」と梅島は言った。「やはり、古美術関係のお仕事をしておいでですか」
「いや、違います」
「加見さんは」と洋介が説明した。「小説を書いているんだ」
「ははあ、小説の先生ですか。でしたら、古画のよいものでも、お世話させていただきたいですな」
「おいおい、ここで商売する気か。わたしのいる前で、贋物をつかませようというんだから、相当なものだな」
洋介にひやかされて、梅島は、弁解がましく言った。
「贋物だなんて、先生、人聞きの悪いことは言わんでくださいよ。知らぬ人が聞いたら、本

気にしますがな」

「本気にするもしないもないさ。梅島隆市の世話する品物に、本物のあったためしはないという噂を聞いているよ」

梅島が美術ブローカーであることは、二人の会話から推察できたが、加見は、この五十過ぎた男のもっている一種のふてぶてしさに、にわかに興味を覚えた。洋介の針をふくんだような言い方に、ふつうの神経ならば耐えられぬはずである。内輪どうしの評価はどうあろうとも、初対面の人間の前で軽侮の言葉を吐かれることは、黙過できないのが自然である。しかし、梅島には、まったく怒りの色はなかった。小肥りの身体をもてあますように、貧乏揺すりをするだけで、洋介に抗議しようともしない。

「梅島さんは」と加見は言った。「古美術の売買をしているんですか」

「はあ、そういうわけでして、ほかに鑑定のほうもやっとります」

「そうですか。うちに、死んだおやじが遺した玉堂のものがあるんですが、いつか鑑定してもらいたいですね」

「玉堂！　それは、結構なものをおもちですなあ。ぜひ、拝見させていただきたいものです」

「加見さん」と洋介が言った。「わたしは、絵の方は、あまり自信はないが、しかし、この

人に鑑定してもらったのでは、玉堂じゃなくても玉堂になってしまいますよ。じゃないと、商売にならんのだから」

梅島は、肩をすくめてみせた。

「風間先生のお知合いの方に、嘘はつけませんよ。大丈夫です。本当のことを申しあげます。だいたい、浦上玉堂の作品は、もう発見されつくしていましてね、たいていの秘蔵品なるものは贋物が多いんです」

「贋物が多い！」

加見はくりかえして言った。前に坐っている葉子が、かれの口調にふくまれている落胆の響きがおかしかったのか、掌で口もとを覆った。

「そう、むかしから、大作家には偽品がつきものなんだ」と洋介が言った。「有名な作家には、必ずつきまとう宿命のようなものなんだね。サント・ブーヴのように〝芸術の最終段階は偽作である〟という見方もあるくらいなんだから、仕方がないんだ。いま、この上でやっている洛山展に出品されている作品のなかにも、どうも怪しいと思う作品もある。洛山の真作ならば、一点百万円から二百万円はするんだが、わたしの見た感じでは、二十万円の値打ちのない品もあったな」

すると、梅島の眼が、不意に輝きを帯びはじめた。それまで、落ち着きなく、左右に動い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor